

予一日花門の也廻廊より花懸門を以て神風鞞を流
し内侍をたれ見て廻廊の如く兼明のまをるるなりと
きし道小まわりの但英彦を好勢と云唐門の如く近お
らむと云ふもわれ又詔楽院のまをるるを切まぬたくなや
しと云ふも不可つとめう向う内侍紀伊守信敷の如く小たり
しの役事のみと云ふは先づ事との一と云ふりわがる雲井
乃わつたか所をあらくを流し一事も云ふ世及びつを
めたる也外と云ひやりと

かゝるもりふあふき身もむらさき乃

雲井の庭乃はくたさくれ

かゝるにちにあつたらし騎をよせらまき古き
たかゝるまきと云ふはたさゆする神代のみと云ふとあ
さきと云ふ

むさし御をとりけらし弱乃林こ小

のほゆや庭のむさきれ庭

于時文政六のこゝ系月教日

浮城守牧野成若

七ノ月

兩朝一書

又ハ小村の法を以て以てその少くは自兵小集候しと義
を唱ふ諸將も稀小成以禮と禁裏山洞諸々百司の宿所小
一御所を以てし朝乃風ハ靡を穿ち夕一の月ハ板岡中
さ一入世捨人の用居いと疑ふ才一のまのまを始め諸郷
雲容晴小袂を沾し清い小居候し付移りて申元南朝の
八年三月始方皇と南殿に幸し一うひを乃妙者を去瑞
解と百官も皆一を居候きよ一宣ひ一はも実母郷
清ら初着りて去る元法より以來代々の忠臣若の若小
肝膽を碎き良策を述へ忠言を奉居事数ありし由
あり一をを用ひしゆも國家中眞の基を用うとありしを

是小揚り居候瑞あふま一ふを若也許容候し或ハ初節
を慕り或ハ自隱遁し朝廷の喜今日の下きふ御子信
毎小是う為候所今ころ乃花季時りたをを祥瑞候り
と一而官ハ慶賀を催し候し其いと色外き小似たり其の
一今已小政直し一歴世執りつとめ小大禮と一平一後
果一而司の向も衣冠を披し朝着戎服を能小若く戦攻
を事と居候也一尚つ一天道にそ古祥を告めりんや志
のこなき一諸々百官も瑞一と思候し候し少く朝宗の姻戚
一を不迫し一秋の間乃衾已小破ましく且之れ飢餓いさ小と
也一おのまは是あを一を獻者子掛めし一旅杖の政をも出

とせよつよ小坂は行くしと由なき矣多此憂を憐れ
たれ人の善人の節成振さず不也よくく戯多を止
きまて御つと人と涙を流しと之りまはこま之其性小感
めい皆く戯多を憐れつと相くく矣多再い来つと一
玉樹止りて去るま之性こまにて紫花絶の妙意代者
法皇の姿と相く善抱んを奈まき教を志しと相く
かく憂せも接人より遺世を為しと極く諸人を
所ま云々の名宣るありり後小口初宿称其由を以て
を指し言ふ所このたひ矣多神原岡迫く妙音を報
しコラ善飛カク小劫見まは今年十月二陽剥カジの後必希都

還幸しと人々疑ひ有し其色ハ口筆乃表地雷の
六小尚りて其辞小敦漫を悔しと一丈易く愛易し
法者より却る者ハ法海の知也其の一者孝元天皇の神宇
小高りて大和國高向寺の矣多祀陽每朝来り相尋本極
特を其心を和ふ小福をねり祀善の類よハ来れもあ
くもハ一不わのさくハと云ふ也ハ物多ハ波是
小帰後の兆を昭しとあハ神遊世の戯多をナク宥らして
係しと一洋小養國を一初とまを始諸々百官新儀の眉を
開き南殿より一奠祭の大礼を一初ハハハ
斯小人皇百一代後小和院と中華院ハ後圓融院の皇子に

神母を通陽川院と稱し孝份内大臣友宗、忠公の由女、水徳三年十二月

廿八日南朝法法位小節とあり聖徳天皇神地小の川より王威に

海を光し朝憲二つて穢廢急かかり八荒風を空

靡きに海を平の秋徳を奏し建武元江の四弊一洗し

る氏再いよの天目を流す事を得しあふおわく帝南

西朝の人氏久し干少苦めを哀憐めい西朝神和眩

ありし主治の恩澤を蒙りしや人事を敷急なりと之

し附の大后二系友の神嗣公奏少の旨なりつて皆く其

と止めありし南朝明徳三年九月南朝中元 九月廿九日十日南殿小出神

りし玉の扉を言し捲りし庭樹の風京を敷覧ありし

如ふに如く神睡眠志きりし其性如き威しとせめ

いし如く密小節於兼信を言し此後の旨をらとありし

並に兼信筆を批し一部を立具ふ其兆をのしし二種の神

翁を神降産りありし如き疑いありしを言し南朝神和眩を

申りありしに海平しる平の恩波小治と人と和言せし如き之

元来和平乃敷急なり不まは諸郷を言ぬるの旨宣言あり

く大内氏系権を義法を俄小に位の小將小叙をし神和平

の如し如く言神を言し九月廿二日京都を打之日

池く言神にあり庭中小候し皆奏つてし神和平の如し

あり由を奏聞し献絶の程を階下小下杯し如き南朝神

一萬民を托育一の神道王法の元意一々神代の始
より人皇乃今小御孫皇統の連綿一々玉のを離すのハ
一神代知小元曆の始安徳天皇西海の彼岸に沈ませぬ一付
神皇一々一海底に没溺と一か扶桑神皇の靈驗王法（あまの）法
子孫澄みゆく水と浮漂りたる源義経是を取て上洛し
風潮不納一々一後多野院殿威斜外を神皇神皇の靈
皇を以て一々一に海をいへるの北を果む如く又元江建武
の礼起り好幾神皇名野一遷すとあり一々一神皇神皇の
帝孫を去く天下を揺動す今既小南小神和年の二ハ述り
神皇の神皇法を催す一々一と官名頻り一々一か二条市岡

白良基王法を身を神皇神皇入内乃と藤原の北ははゆらん
吾徳の徳も小似たり又新帝即位元曆の例を以て還幸の
式ハ先帝元江の條幸に準るま去日良辰を擇む如く永
戒を以てしめし其後招法は之一々一と奉りて一々一と
獻焉ら一々一其意に從つてあり先例此式も同く神皇一々一
関白藤原公国子息権大納言道忠の廣揚冬藏兼宣公武臣
細川右京左史賴元治次郎の警備ハ赤松上総介義朝大内は位
少將兼以てしめし此人一々一十月廿六日小南野一系修也
一々一南野神威斜外す同廿八日南野の宮を山神
一々一風聲を南野の山一々一進め給ひし神皇神皇の武の

赤松上総介義江六子余誘ゆ〜不誦〜次小松政園白大信
衣冠の〜信を〜のい其かの洞院大納言花山院大納言
竹林院中納言九條大外記言辻教信を始〜〜渚の雲雲百司
の官名我を〜〜風筆の前後記有列〜次小大内正位
少将七子余誘ゆ〜後言〜六軍道路を掃〜おも唐世蜀
道の遷幸も角女と男ひ〜好く艶英外〜百柳之坊を
急〜をひ〜かて閏十月二日於小遷幸行〜車下誘我大覺支
入の〜建武の頃〜か智運世の用〜あひ聖代
小後〜あふ屋さ〜世々の帝宸濤を傾け獻焉を悦ま〜
あひ〜も今枕頭一斤の沖爰とあり〜久帝の獻焉を悦ま

あふ屋の沖懐好き〜〜をわ〜福と進〜激運の所能あり
い迄鄙小朽果の〜人〜於近〜遷幸行〜一終と分知由
勝り〜表悦の獻焉斜〜〜宮野の宮居不随い〜し
公御后妃と腐の沖方〜〜聖代小後〜あひは款き〜を
〜〜羊あら〜あ〜〜男ひのひ〜都の宮小再ひ歸り
あひ元江の者小川〜〜私の趣を啓り〜あひは居部〜用
月小果主〜〜大覺寺の宮居〜和使之〜神意の入内哉
催され〜おも渚々百官信奉〜あひ茶湯を圍い〜風扇不
純の身好朝野〜渚人〜もふ子威を唱〜天下を平〜を
洗〜身好